

右の年を想うに約九十年前昔のことである。が現在根羽地区の内、市の瀬から横旗までの間を国道一五三号線の改良工事
中だ。この部分の完成は昭和六十二年三月迄に完了の予定の
由。この儘の状態だと中野から大畑貝曲までの間と陣場橋以
北赤坂峠までの工事は右の六十二年三月までの間に果して工
事完了の日はやって来るか一向に見当がつかない。

右の三州街道（県道）完成の時の根羽村字下町と字万場瀬
の間にある根羽橋について、この「根羽」をどう読むか？こ
の橋の左側の石柱には「根羽橋」とあり、右側のそれには「祢
ねはし」と御家流の墨痕つるわしい写真が只今手元にある。

ネバかネバネか……この語源はいつの時代に始まるで
あろうか？目下各所で地名研究の熱が高まっている。

わが尊敬する三河国伊良湖岬の槽谷磯丸翁の紀行文には
『文化十四年三月十六日、田かれの信濃屋弥平方を出て、津
具を経てくると、ねばねの里なるたをやめども袖をひきとめ
ればよめる

行きさきはまたはるかなる旅衣

いそいそ袂をひきなとめそ

ついにひきとめられて住吉屋にかりそめの枕をむすぶとて

うちなびく今宵ねばねの若草を

旅の枕にからんとそおもふ

代価を要するののか——だが、踊りの動作はスローモーションな
調なテンポだし、唄の如く、「足で九つ、手で七つ」の示す如
きものである。とすると、この唄の急所は③ではないか？こ

大賭博場体験記

下条の権現様（入登山神社）のお祭りといえは、昔は博奕
でもかなり有名なものであった。というのは春祭り（祈年祭）
と秋祭り（例祭）の二度の大祭には神社の近くの山の中で、
大がかりな賭博が開かれるということが噂になって、それが
かなり広くそれとなく言い伝えられ、いつの間にか「権現様
の博奕」として有名になっていったものと思われる。でも、
それを眼のあたり見たものはいなかったようである。

ところが、その賭博現場を直接見る機会が訪れたのである。
それは、大正十年か十一年と思われるので、もう六十五、六
年の昔のことである。私が青年会員のころで、例祭の夜の打
ち上げ花火終了の慰労会の時であった。入登山神社の祭り
と言えは、昔から大変賑やかな祭典で、崇敬者は広範囲に亘
て、飯伊地方の近郷近在はもちろん愛知、静岡、岐阜にまで

この様に一首を詠んでいる。が、右「一首」とも漢字でなしに「ね
ばね」と仮名で記しているのは根羽はネバでなく、ネバネと
はつきり語ってた証拠である。

① ねばね十六習いたきやござれ
金の十ッ百両ももてござれ

② ねばね十六習いたきやござれ
足で九つ手で七つ

③ ねばね十六ささげのとしよ
たれにつまそか初なりを

④ ねばね名物数々あれど
中に大杉枝垂栗

⑤ ねばねよいとこ三方の辻で
中にゴハンヨが立ちくらす

これらは根羽の盆踊歌の中のもので、殊に初の三つは「ね
ばね十六」のもと唄で、これが大正時代に新野に移入（俣岡
氏により）して行き、終戦後に一時「新野十六」として唄わ
れたようだ。が、本年夏の盆踊り見学の折には、はつきり「ね
ばね十六」とわが耳で確かめて来た。只、その中でちがうの
は「かねの十ッ百両」が、新野では「かねの四五両——」と
なっていることである。右の「四、五両」は「シ、ゴ」四両
か五両か——だが、「十ッ百両」は百両の十倍、つまり千両と
解すると、「ねばね十六」の踊りはそんなにむづかしく高価な

の解説は茲では私見はやめ、読者の想像に一任する。（60、11、
23）
（筆者 千 350-07 根羽村小川）

宮 島 恵 一

及んで、当日は広い境内は参拝者で埋め尽くされ、長い参道
も長蛇の列をなしていたもので、特にその夜の奉納花火は観
ものであった。その花火打ち上げの主役は青年会だったので
ある。

その慰労会の席上、ある一人の青年が「今夜、細野原に大々
的な賭博が開かれているそうだから見に行かまいか。」と言
出したのである。ちょっと恐ろしいような感じもしたが、い
ゆる「こわいものみたさ」という心理も手伝ってか、衆議
一決とまではいかなかったけれど、十二、三の者が現場に向
かうことになった。それは神社からかなり離れた場所である
ので、暗闇の足許に気を配りながら声をひそめて近づいてい
った。現場あたりまで来ると、かすかにその辺がボーンと明
るくなってくる。小高い丘に上がると眼下に現場を見下ろす

ことが出来る。私たちはそこまで来て思わずアッと固唾を呑んだ。遠くから街の夜景を見るように、あの広い細野原いっぱいにはチカチカと灯が揺れ動いている。

いよいよ来たか！ 高鳴る胸の鼓動を抑えて私たちは気がつかないように、恐る恐る近づいていった。遠くから狐火のように揺らいで見えたその灯りは、なんと百々ローソクであった。それが何本となく立てられて、その周りには二、三十人位が一つの車座になって、ギラギラと脂ぎった赤い顔が、緊張と怒号の中に揺れ動いている。それぞれに手甲、脚絆、草鞋ばきのいでたちで、着座を敷いて賽を振って勝負を競っている。その中には女も何人か混ざっている。女たちは膝まで裾をまくり上げて坐り、全く仰々しい艶姿でもある。親分らしい男の薩の下には札束の山で膝が高くなっているほどである。

こうした車座が何十となく細野原いっばいに広がっているのだから驚く。驚くというよりも、なんとも異様な状況である。さらにその周辺には酒や肴、弁当を売る露店商が立ち並んで、異様な雰囲気を作り立てている。この山の中に人力車が一台おかれているのは、おそらく大親分の物であろうか。私たちはただ呆気にとられて、その異様さに吞まれてしまつて茫然としていると、突然一人の幹部らしい男がヌツと現れた。これは大変なことになったと思つたが、もう遅い。ピ

クビクしている、その男は意外にやさしく問いかけてきた。

「あなた方は入野の青年衆ですか。苦勞さまでございます。これはまことに些少ですが、一杯召しあがってください。」と十円札を渡してくれた。祭りの法被でそれとわかったのであろう。恐ろしさに震えていた私たちは肩の力が抜けていくのを感じた。私たちはその十円札を持って飲み屋に向かったことは申すまでもない。

それから何年か後、警察の手が入って、こうした大掛かりな賭博は姿を消してしまつた。その時から六十有余年、その体験を味わつたのも既に私一人になつてしまつたことをさびしく思う。

(筆者 千399-21 下条村入野 八十三歳)

南信州の民俗芸能と文化

10月のテレホンサービス

阿南地方の民俗、文化、芸能を全国に紹介するNTT阿南局の10月のテレホンサービスはつぎの通り。

10月前半Ⅱ「満島神社の秋祭り」

10月後半Ⅱ「下条歌舞伎」

電話番号 (0260) 221-3388

満・鮮流浪の記(五)

—終章—

我是日本人(中国に生きて)

私はこの流浪記を書きながら、度たび中国からの残留孤児(四〇―五〇歳以上になるおじさんやおばさんを孤児と呼ぶことに抵抗を感じつつ)の訪日について、テレビや新聞の報道を見たり聴いたりした。そして大陸に残された同胞の今日までの歩みが如何に悲惨であり、複雑であったか、更に今後の生活が如何にしたら安定するかの問題解決の容易ならざることを痛感した。

そして、彼らが夢にのみ見た祖国に帰って、現実の祖国を見た感激は誰にも共通した欲びであった。然しその中には肉親に会えて喜ぶ人、期待した肉親に会えず悲嘆のうちに帰る人、希望が叶えられず悲しみの中で、中国の養父母や家族と共に中国人民として働きつつ、日中友好の橋渡しに、新しい生き甲斐を見出そうと決心して帰る人、肉親に会えても日本の生家の事情で悩むひと、更には言語障害の思わぬ壁にあって悩む人等数えあげればきりはない。

小川 正 三

そうした人々たちの中で訪日後帰国した人が、中国帰還後果たしてどのような生き方をしているだろうか。可能ならば、中国へ帰還する人々たちについて行つて、四〇年余前に二カ年足らず住んだ彼の地の実情を視察し、先に帰還した人たちの実情を知りたいと思つた。然し、それは八〇歳の私には不可能なことははっきりした。

そうした時、幸なことに今年(八六年)四月から五月にかけて朝日新聞に次のような連載記事が目についた。

「題名 「我是日本人」(私は日本人です)」

連載 四月一七日―二日 五回(第一部)

四月二四日―五月一六日 一六回(第二部)

計二十一回

取材担当者 坂本章彦 編集委員

原賀 肇 記者

二人の取材担当者は、極寒の二月から三月にかけて、中国東北地方に住む残留日本人を訪ねて歩いた。その目的は、残